市民のページ Vol.7

このページは廿日市市の５地域のコミュニティや市民活動団体で活動している市民の皆さんが集まり、企画し作成したものです。

スタッフ：正木康章・野村直(廿日市)／山田耕造・伊藤里美(佐伯)／能島美緒・西村智恵(吉和)／大島久典・文理一男・松本妙子(大野)／久保田渉 (宮島)

問い合わせ　協働推進課☎㉜3810

いにしえの神（嚴島）でつながる廿日市市

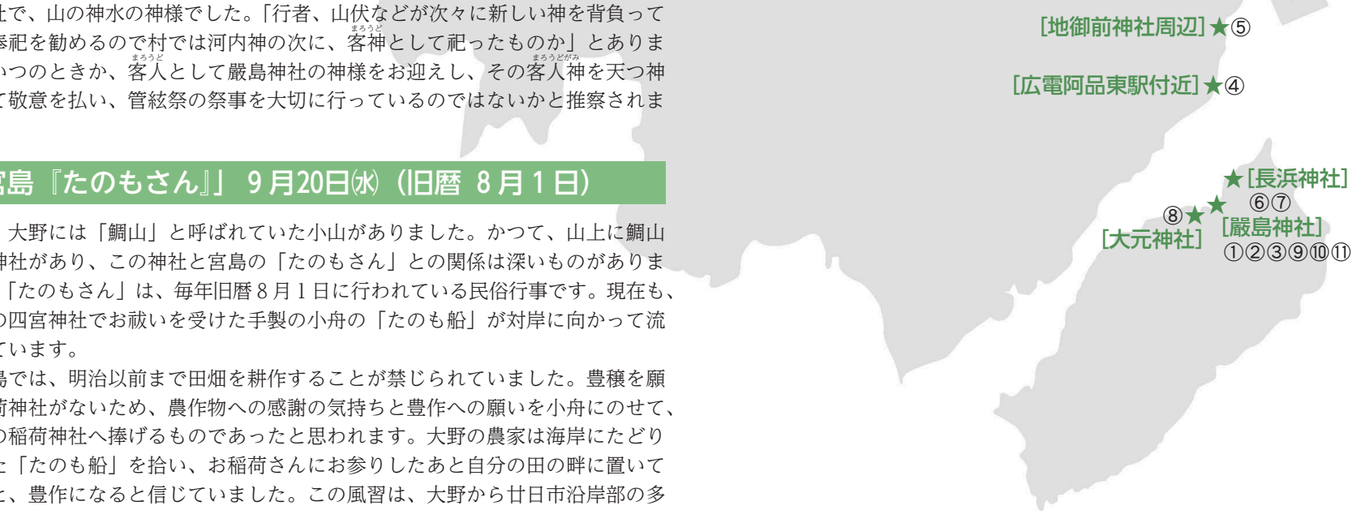
廿日市市の夏といえば、日本三大船神事の一つと言われる宮島の「管絃祭」があげられます。

実は、宮島や地御前以外でも「管絃祭」は行われているのです。歴史をたどれば、それぞれの４地域に、世界遺産を有する宮島に関連した行事やゆかりの地が人々に継承され、現存しています。

今回はそれらを紹介し、ぜひ皆さんにも、いにしえの神がつないだとされるその歴史に思いをはせながら、それぞれの地域を訪ねてほしいと思います。

宮島地域「管絃祭」 8月8日㈫（旧暦 6月17日）

対岸へ向かう御座船



「今年もありがとう！」「よう来てくれたね！」「しっかり頑張れよ！」この日は、瀬戸の海でつながる人たちの気持ちが「管絃祭」に向けて一つになる特別な日です。

島の人たちは、この日のために準備や練習を積んできた漕ぎ手たちに、夕刻からの一大神事を前に軽食や冷たい飲料、もみじ饅頭などを差し入れ、もてなします。

神事を終え嚴島神社を出発した管絃船は、地御前神社へ向かい祭典や雅楽の奉奏をした後、再び宮島に戻り、長浜神社、大元神社でも祭典と奉奏を行います。

長浜神社では提灯の無料配布があり、嚴島神社へ向けて参道を歩く「ちょうちん行列」に参加することができます。嚴島神社に戻った管絃船は大鳥居をくぐり、客神社前で祭典を行った後、枡形という社殿の狭い部分に入り、船を三回漕ぎ回します。ここは、漕ぎ手たちの見事な櫂さばきと勇壮さに、観客からの拍手や歓声がひときわ大きく盛り上がる祭り一番の見どころです。潮の香りと管絃の音色に包まれて、宮島ならではの厳かで幻想的な夏の夜を存分に堪能してください。

【祭の進行と管絃船の経路】

① 15:00　御神魂出発の儀式
② 16:00　御本殿出御［嚴島神社 本殿］
　ご神魂を御座船に運びます
③ 16:40　大鳥居前の儀［嚴島神社 大鳥居付近］
④ 18:00　火立岩［広電阿品東駅付近］
⑤ 19:20　地御前神社［地御前神社周辺］
　祭典、奉奏が行われ、周辺には露店が並びます
⑥ 20:30　管絃船のお迎え［長浜神社周辺］
　19時30分頃から提灯が無料配布されます
⑦ 21:00　ちょうちん行列出発［長浜神社周辺］
　嚴島神社までの「ちょうちん行列」に参加できます（予約不要）
⑧ 21:30　大元神社［大元神社周辺］
⑨ 22:10　火焼前［嚴島神社 火焼前］
⑩ 22:30　客神社前［嚴島神社 客神社］
⑪ 23:00　御本殿還御［嚴島神社 本殿］

【臨時船の最終便】

宮島松大汽船　宮島発　24時
※当日に帰る人は、船舶の時間を確認の上、参加してください

廿日市地域「洞雲寺の金岡水と『花まつり』」毎年５月８日

金岡水
（佐方1071－１）

洞雲寺（曹道宗応龍山洞雲寺）は、JR廿日市駅の北側にある禅宗の寺で、長享元年(1487年)に金岡用兼禅師を周防から招き開山した藤原氏の菩提寺です。この時代、辺りは海岸線が深く入り込んでいたため清水の確保に困っていました。そんなとき、「洞雲寺の本堂脇を掘るように」と嚴島明神のお告げがあり、掘ると清水が湧き出し、人々は「金岡水（きんこうすい）」と名付けました。

陰徳太平記にも「嚴島の明神が洞雲寺に参禅して神力により清水を湧水した」とあります。宮島の杉の浦にも金岡用兼禅師が座禅をすると水が湧き出たという伝説がある「金岡水」が現存し、この寺とつながっているといわれています。毎年５月８日の「花まつり」では、洞雲寺の御開帳により本堂脇で500年以上湧き続く名水「金岡水」を見ることができます。かつての花まつりは露店が並ぶ賑やかなものでしたが、今はスタイルが変わり、門前で「洞雲寺マルシェ」が催され、多くの人で賑わいます。

佐伯地域「帯掛明神の管絃祭と重なり岩」 8月8日㈫（旧暦 6月17日）

帯掛明神
（津田・岩倉ファームパーク近く）

嚴島明神の管絃祭当日、その時刻に合わせ祭りが行われる場所が佐伯地域にあります。昔は夜店も出て大変賑わっていたそうですが、現在は神職による神事のみが行われています。その場所は、「重なり岩」を祀っている帯掛明神です。落ちそうで落ちない大きな岩には、地域で語り継がれる伝説や民話があります。

伝説によれば、出雲の国から市岐姫命（いちきひめのみこと）（「市岐島姫命（いちきしまひめのみこと）」と称する場合あり）が乳飲み子を背負い嚴島への旅の途中にこの重なり岩で休息され、幼児を背負っていた帯をこの岩にかけられたといいます。以来、この岩を「帯掛け岩」と称するようになり、その由来から市岐姫命を祀って帯掛明神としました。その後、嚴島に住まわれた市岐姫命とのご縁を大切に思い、同じ日に管絃祭が行われるようになったといわれています。

時を重ねて現在では、重なり岩は「落ちない奇岩(祈願)」として受験生、立候補者が絵馬を奉納、お祓いを受けに訪ねる場所になっています。

吉和地域「頓原神社の管弦祭」 8月8日㈫（旧暦 6月17日）

頓原神社
（頓原・魅惑の里近く）

頓原神社では、嚴島神社で管絃祭が行われる旧暦の６月17日（十七夜）の夜に、管絃祭の祭事が行われています。頓原神社の宮総代を務める中本和行さんによると、「その夜には集落のみんなが集まり、神殿にお参りして、十七夜の月を眺めながらしばらく神社で時間を過ごして、解散するんです」と言います。いたってシンプルな祭事ですが、毎年欠かさず、大切に勤められているということです。

地域の歴史を綴っている「吉和村誌」によると、頓原神社はもともと「小嗣河内山」で、山から流れ出る小川の流域（河内）に広がった生活共同体単位に祀られた社で、山の神水の神様でした。「行者、山伏などが次々に新しい神を背負ってきて奉祀を勧めるので村では河内神の次に、客神として祀ったものか」とあります。いつのときか、客人（まろうど）として嚴島神社の神様をお迎えし、その客人神（まろうどがみ）を天つ神として敬意を払い、管絃祭の祭事を大切に行っているのではないかと推察されます。

大野地域「鯛山稲荷神社と宮島『たのもさん』」 9月20日㈬（旧暦 8月1日）

鯛山稲荷神社
（大野原三丁目）

昔、大野には「鯛山」と呼ばれていた小山がありました。かつて、山上に鯛山稲荷神社があり、この神社と宮島の「たのもさん」との関係は深いものがありました。「たのもさん」は、毎年旧暦８月１日に行われている民俗行事です。現在も、宮島の四宮神社でお祓いを受けた手製の小舟の「たのも船」が対岸に向かって流されています。

宮島では、明治以前まで田畑を耕作することが禁じられていました。豊穣を願う稲荷神社がないため、農作物への感謝の気持ちと豊作への願いを小舟にのせて、対岸の稲荷神社へ捧げるものであったと思われます。大野の農家は海岸にたどり着いた「たのも船」を拾い、お稲荷さんにお参りしたあと自分の田の畔に置いておくと、豊作になると信じていました。この風習は、大野から廿日市沿岸部の多くの稲荷神社で同様のことが行われていたと思われますが、大野は潮流など地形的な関係から、とりわけ「たのも船」との縁が強かったものと推測されます。

次回の市民のページは平成30年2月です